



隼人(はやひと)の 瀬戸の巖(いわお)も
年魚(あゆ)走る 吉野の滝に なほ及(し)かずけり

6月の万葉集 巻6-960 大伴 旅人

隼人の瀬戸へ来てみると白波が大岩に砕け散り実に勇壮な風景だ。でも鮎が身を躍らせて走っている吉野の滝の爽やかさのほうがもっと素晴らしいよ。

ウェルビーイングとは、幸せに生きること？

役場庁舎のある南郷区の環濠周辺の小麦が黄金色に色づきまさに、麦秋の候を迎えています。また、5月の初めの頃に新緑だった木々も深い緑に姿を変えています。さらには、庭先の青やピンクのアジサイが雨に打たれて鮮やかに咲き、私たちの目を楽しませてくれます。



園や学校では、令和7年度がスタートしてから、あっという間に2ヶ月が経ち、1学期も折り返しの時期を迎えています。その間、子どもたちは園生活や学校生活にも慣れ、充実した日々を送っています。

ところで、このたよりを読んでおられる皆さんは、「ウェルビーイング」という言葉を聞かれたことはありますか。多様化する生き方や価値観の変容が進む現在、様々なジャンルで注目を集めている言葉です。先月、東京で行われた全国の町村教育長会定期総会及び研究大会に参加しましたが、その大会の記念講演のテーマが「ウェルビーイング」でした。演題は「日本社会に根ざしたウェルビーイング教育をデザインする」というもので、講師は武蔵野大学ウェルビーイング学部教授の保井俊之さんでした。保井さんは、自分のことを「としちゃん」と呼んでほしいと気さくな一面を見せながら、自分の半分がいりこ出汁でできているという、出汁のように味わい深い人間だとユーモア溢れる自己紹介をされました。保井さんのプロフィールは、東京大学卒業後、財務省、金融庁など主要ポストを担当しながら公務員として、また研究者として、社会を前向きに変えるためのワークショップを通じて、会社横断的・地域でのイノベーションの方法論を学生たちに教えているということでした。



講演の内容を要約してみると、

- 「ウェルビーイング」とは、端的に言えば、はつらつと元気な状態、ウキウキとご機嫌な状態、ワクワクといきいきとした状態と考えてもらえば良く、肉体的、精神的、社会的にすべてが満たされた状態を言う。
- 「ウェルビーイング」は、世界保健機関(WHO)の憲章にあり、70年前から国際的に広がった言葉で普通の人より幸せになるための心理学へと変化していったようで、現在は、ウェルビーイング3.0で、個人から集団、そして社会へと進んでいる。
- 国が示す第4次教育振興基本計画には、日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上が謳われていて、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じ、地域や社会が幸せや豊かさを

感じられるものとなるための教育の在り方等を示している。

- 世界幸福度ランキングでは、143カ国中、フィンランドが第1位で、日本は残念ながら55位となっているようです。また、幸せな人はそうでない人より7.5年から10年長生きできるという研究結果があり、主観的健康観(客観的に病気かどうかということではなく、自分が健康だと思っていること)が高い人ほど病気のあるなしにかかわらず生存率が高い。
- 文化・地域が違うことでウェルビーイングの価値観も違い、欧米は獲得的幸福度であり、主な幸福とは個人的な成功(例:良い成績をとる)を求める個人達成志向となる。アジア・日本は協調的幸福度で、主な幸福とは対人関係の調和(例:周りの人たちと仲がいい)を求める関係志向である。
- 日本の小中学校の児童生徒の主観的幸福度は、教師のサポートが重要で、友だち関係と自己肯定感が関係している。また、他国と比較して日本の若者のみが統計的に自己肯定感が低い。
- ウェルビーイング教育の中で、教育の果たす役割は、他者との関係の中で人生においてウェルビーイングに生きる能力を育てることであり、これからのウェルビーイングな教育の鍵は、日常生活を基盤に、家族・地域・社会に関わりながら実践的な学びを通じて協働して問題解決し、自分たちの未来をより良い状態(ウェルビーイング)をデザインする力を養うことにある。
- まとめとして、「ウェルビーイングになることを目指す」(実現する)のではなく、「ウェルビーイングに生きている」(状態)になることが大事である。「自利利他円満」



講演を聴いた感想として、ウェルビーイングという考えは、70年前から言われましたが、最近になって一般社会だけでなく、国の教育振興基本計画にも謳われているように、ウェルビーイングな教育を推し進めていかなければならないと感じました。また、すべての人が幸せに暮らせる社会を構築するためにも、また、子どもたち一人一人の幸せのためにも、ウェルビーイング教育を推進したいと感じました。

今月の一言

やって見せ、言ってみせて、させてみて、誉めてやらねば、人は動かじ

山本 五十六

子育てや教育、人材育成によく使われる言葉で、いくらマニュアルを読ませたり、口で上手く説明したりしても、具体的なイメージが掴めなければ完璧な理解には及びません。

人に何かを教える時は、まず自分が率先してやって見せることが大切で、やってみせた後は、しっかりと説明して聞かせることが重要だということです。そして、見せて聞かせたあとは、実際に相手に実践させて、その成果を評価し、ほめるというかその出来栄えに対し肯定することが何よりも人を育てることにつながると思います。

教育委員会の取組

春の学校・園訪問を行いました！

5月20日(火)から6月6日(金)にかけて、春の学校訪問(小中7校)と園訪問(幼稚園3園、北かぐやこども園・畿央大付属広陵こども園)を実施しました。この目的は、年度始めの校長先生、園長先生の学校・園の当面する課題、先生方への指導、働き方改革、地域とのつながり等の経営方針を聴くことや先生方の授業の様子を見ること、そして、指導要録などの諸帳簿の点検等でした。訪問には、教育委員さんをはじめ、部長、課長、主幹、指導主事が参加し、特に学校訪問には県教委から管理主事も来ていただきました。

訪問したときのすべての子どもたちは、元気よく「おはようございます」「こんにちは」と明るく笑顔であいさつをしてくれて、とてもうれしく、心が洗われるような清々しさを感じました。

まずは、校長室・園長室で、授業参観・保育参観の流れ等の日程説明を聞いた後、授業参観・保育参観となりました。授業参観では、主に若手の先生方や今年度、広陵町に転勤された先生方の授業を中心に



見せていただきました。授業では、①めあて(目標)と振り返り(まとめ)の提示ができているか。②主体的・対話的な学びができているか。③Chromebookが授業の一場面で使われているか。④教師主導型になっていないか。⑤学習環境が整備されているか。等のポイントとして参観させていただきました。

小学校の授業では、9割以上の先生がめあての提示はされていましたが、中学校では6割ぐらいと少し低めで、振り返りはあまりされていなかったように思いました。



また、子どもたちは先生の発問・課題に対して、主体的に学習活動をしているかについては、小中学校ともほとんどされてなくて、どちらかというと先生方が黒板を背にして、教師主導の一方的な説明や教え込みが多かったように思いました。ICT教育を進めるChromebookの活用も今回はあまり使われていない状態で、少し寂しさを感じました。

学習環境は、どの教室も黒板の周りにはあまり掲示物がなく、子どもたちが黒板の板書に集中するよう配慮されていました。教室後ろの壁面には、子どもたちの絵や習字などの様々な作品が掲示され、作品の出来映えに心を奪われました。

授業後は、校長先生方の学校経営のポイントや授業参観を通して感じたことなど、参加した皆さんから感想や気付いた点、ここを改善すればもっと良い授業になるなどのご意見をいただきました。



幼稚園では、3歳児から5歳

児の子どもたちの保育を参観しましたが、本当に無邪気でかわいらしくて、園庭では、友だちと水遊びを楽しんだり、異年齢の子どもたちとの遊びも思いっきり楽しんだりしていました。また、3歳児のクラスでは、入園してからわずか2ヶ月余りなのに、イスにしっかりと腰かけて先生のお話を目を輝かせて聴いていました。



こども園では、1号・2号認定となる3歳から5歳までの幼児、3号認定となる0歳から2歳までの乳幼児の保育を参観させていただきました。こども園は、子どもたちの数もとても多く、特に乳幼児の保育には先生方がとても気を遣って保育されている姿に感動するとともに、仲良く元気いっぱい遊んでいる姿は本当に微笑ましく、子どもたち一人一人の笑顔に癒やされました。

それぞれの園長先生から、園の経営案や教育目標などを聴かせてもらう中で、特色ある保育・教育をしてもらっていることに感謝の言葉を述べさせていただきました。

学校訪問・園訪問を終えてみて、何よりも子どもたちの屈託のない笑顔と元気で明るい表情を目の当たりにして、子どもたちや先生方のために、これからもできる限りの支援・協力をしたいと思いました。

子どもたちの力が結集した70周年記念イベント！

5月25日(日)の午後からかぐや姫ホールにおいて、第1部の令和7年度の自治功労者会議及び町政説明会と第2部の広陵町町制施行70周年記念イベントが行われました。特に第2部は、こどもまんなか社会を反映した取組として、子どもたちを中心に据えたイベントを半年前から総合政策課と教育委員会で企画し、町制70周年に際して、すべての年代の子どもたちが参加できるイベントの実施と子どもたちがイベントに関わることで広陵町のことをもっと知ってもらいたいとの想いで立案しました。

2部のはじめには、70周年のキャッチフレーズ・ロゴマークの表彰の後、オープニングとして畿央大学と大和広陵高校の書道部による書道パフォーマンスがあり、昨年に実施した小中学生による「笑顔あふれる学校、笑顔あふれる広陵町」にするためのこども会議の動画放映と子どもたちによる説明、そして、バンドパフォーマンスとして、畿央大学軽音楽部と大和広陵高校吹奏楽部の演奏が行われました。2部の司会は、素人落語家の広福亭ばいさんとその弟子、竹児(ちくじ)くんと月(るな)ちゃん、面白おかしくとても上手な進行でした。



書道パフォーマンスでは、キャッチフレーズの最優秀作品「ともに広陵、もっと広陵」を力強い筆さばきで書き上げてくれました。こども会議では、笑顔あふれる学校と広陵町にするための多くのアイデアを提案してもらいました。

バンドパフォーマンスでは、広陵町歌をロック調にアレンジしたもの、そしてマツケンサンバを大和広陵高校の生徒会の皆さんがステージに登ってのパフォーマンスで大いに盛り上がりました。この日は子どもたちの力が結集したすばらしいひとときでした。

